

述語部否定構造における文法カテゴリーの結合

—若松賤子訳『小公子』を資料として—

The Complex of Grammatical Categories in the Predicate Constitutions Including Negative Elements: A Case Study of *Little Lord Fauntleroy* Translated by Wakamatsu Shizuko

博士後期課程 日本文学専攻 2008 年度入学

許 哲
HO Chol

【論文要旨】

本稿では、近代日本語の否定表現を含む述語部構造内において、述語における文法カテゴリーが否定表現とともに、どのような相互承接の順序をとって実現するのかを、若松賤子訳『小公子』を資料として考察した。その結果、次のようなことが確認された。

- (1) 日本語では一般的に、述語部構造における文法カテゴリーの結合は「ヴォイス (Vo)・アスペクト (A)・否定 (N)・テンス (T)・モダリティ (M)」の順序で実現される。しかし本調査によれば、採集した述語部否定構造は「ヴォイス・アスペクト・丁寧・否定・テンス・の／こと・丁寧・テンス・モダリティ・丁寧・終助詞」と、より細かくなっていた。
- (2) 本調査では、述語部否定の形式が 21 形式見られ、全 197 例あった。それらを「丁寧・否定・過去」の形式、推量を含む形式、可能を含む形式の 3 つに分類することができた。
- (3) 「丁寧・否定・過去」の形式には 6 形式があった。これらは「マセン系」と「ナイ系」に分けられた。マセン系は、「ませんでした」が圧倒的であり、それとの併存という形で「ませんでした」があった。ナイ系では、「なかったんです」と「ないのです」ではテンスの位置に前後差があり、「なかったのです」は前後両方にテンスのある形式として存在していた。
- (4) 推量を含む形式については、今回採集した 21 形式のうち 13 形式と、約 3 分の 2 を占めた。これらも「マセン系」と「ナイ系」に分けられ、「丁寧・否定・過去」の「ませんでした」と「ませんでした」の構図と同じように、「ませندろう」と「ませندしよう」、「ませんかったでしよう」と「ませんでしたらう」の共存があった。
- (5) 今回の調査では、ヴォイス、アスペクトの言語事象が関与する、否定表現を含む述語部は見られなかった。ただ、ヴォイスと同じ位置に来る可能の「れる／られる」が付いた形式が 2 例、「可能・否定・丁寧・推量」も 1 例見られた。

【キーワード】 近代日本語 述語部 否定 文法カテゴリー 若松賤子訳『小公子』

1. はじめに

日本語の文法研究は、ヨーロッパ文法を受容し、その研究成果を展開させることによりその地位を確立し、発展してきた歴史を持っている。そのことから、個々の日本語の文法事象についての研究は、ヨーロッパ文法の成果に対して、より一層の一般性を付与することにもなり得る¹。そのような成果の中には、述語にかかわる文法カテゴリー—ヴォイス・アスペクト・テンス・モダリティーも含まれる。

述語は文のなかめであるので、その研究は構文論の中核となる。日本語の述語の研究は、山田孝雄（1936）²に始まり、時枝誠記（1941）³により深められ、渡辺実（1971）⁴によって飛躍的に進展したとされる⁵。そしてその後も、北原保雄（1981）⁶をはじめ、関連する多くの研究がある。

本稿では、近代日本語の否定表現を含む述語部構造内において、文法カテゴリー同士のふるまいがどのようなものであるのかを考察する。具体的には、述語における文法カテゴリーが、否定表現とともにどのような相互承接の順序をとって実現するのかを、明治期に英語から翻訳された文学作品を資料として研究する。

2. 調査対象

本稿においては「否定要素」を、形容詞「ない」、ならびに、「ぬ」「ない」「まい」「まじ」等、用言に下接する否定の助辞を総称したものとし、「否定表現」とは、それらの要素が、用言ならびに体言に関与した表現とする。また、「述語部否定」とは、主節または従属節において、他の文成分と格関係を構成する述語部を否定することを指すものとする。

本稿では、活用可能な否定要素を含む述語部の用例を採集し、そのうち、述語の文法カテゴリーを含むものを調査した。なお、「ません」「ないです」のみで用いられている、「丁寧・否定・現在」の単純な結合形は、今回の調査では取り上げなかった。

以下に、二葉亭四迷『浮雲』から一例を挙げる。

- #1 ^{わる}悪ければ^よくしやうといふが^{ひと}人の^{じやうべ}常情で^あ有ツてみれば、^{たと}假令へ^{めんしよく}免職、^{きうしう}窮愁、^{ちぢよく}耻辱など、いふ^{ぐわい}外部の^{げきいん}激因が^な無いにしても、^{せい}お勢の^{ぶんざう}文三に^{たい}對する^{かんじやう}感情は^{さうばんいつべん}早晩一變せずにはゐなかつたらう。[第三篇第十六回]

¹ 益岡（2013: 201）参照。

² 『日本文法学概論』（宝文館）。

³ 『国語学原論』（岩波書店）。

⁴ 『国語構文論』（塙書房）。

⁵ 飛田編（2007: 255-256）、「述語」の項（北原保雄執筆）を参照。

⁶ 『日本語助動詞の研究』（大修館書店）。

上記の述語部における下線部の語構成は、「ない・た・ろう」となる。述語部構造における文法カテゴリーは「肯否（認め方）・テンス・モダリティ」であり、ここでの意味は「否定・過去・推量」となる。

3. 調査資料

資料としては、若松賤子訳『小公子』⁷を調査する。その筆名が示すように、敬虔なクリスチャンであった若松賤子の翻訳による『小公子』は、当時から流麗な言文一致文による名訳の誉れ高く、森田思軒⁸や坪内逍遙⁹に激賞された、貴重な日本語資料である。また、原文が英語であるので、若松の英語の実力¹⁰と翻訳の態度から、述語部の文法カテゴリーに該当する言語事象が、比較的日本語に忠実に写されていることが期待されるので、本研究の目的にも合致した、ふさわしい言語資料と言える。

若松訳『小公子』には、以下の三種のテキストが存在する。

①「女学雑誌」227号から299号まで、休載（238～265号）を挟んでの、45回の連載。

（明治23（1890）年8月23日－明治25（1892）年1月9日）

⁷ 原著は *Little Lord Fauntleroy* / by Frances Eliza Hodgson Burnett / New-York: Charles Scribner's Sons, 1886.

⁸ 「偶書 思軒居士『小公子』を読む」（『郵便報知新聞』明治24.11.15）で以下のように述べている。

「……余は第一に譯者か英文を読むの容易なる猶ほ父母の手紙を読むがごとくに感ず世間鬚眉男子にして尚且つ往々譯り讀む成語イデオム悉く熟路をたどるが如し故に之を邦語に翻へすに及て極めて明白極めて透徹些しの晦渋些しの沮滯あることなきなり / 尤も服する所は談話ダイアログなり……余が之を読むとき讀みて妙絶の處……之を原文に參じへ考るに敢て一字を増さず敢て一字を損せず只た忠誠に謹勤に原文を摸せるなり / 其の記述叙事の處も亦た温順 妥當にして毫も生硬ことさらにせるが如き迹を見ず諄々として而かもくだしからず原文を嚴守して而かも拘づらひ泥まず平易復た簡淨殆と遺憾なきに近かし」

⁹ 「女学雑誌」295号（明治24.12.12）に掲載された「小公子の評（其二）」の中で以下のように述べている。

「……譯文はまことに流暢平易なれと其中に譯者が深切なる苦心の跡見えたり就中長幼貴賤の言語を別たんとて又は文情の調和をはからんとて「キット」「大したもの」「鼻が高い」「目がない」等の俗語を用ひたるが如きは殊に全力を灑きたりと見えていとめでたし……「人にいひへしました」「しつかり歩いてゐました」など言葉を重ねたるはおのづから優しき女教師が幼童に教ふる時の風に似たり何れも譯者の婦人たるを證してなかへにゆかし兎にも角にも當今外國美文輸入の必要あるに際し斯く原文の精神と外形とを寫し出さんと力めし翻譯の見はれしは文學のため賀すべき事なり。（『早稻田文學第四號』）」

¹⁰ 『小公子』（博文館刊）「緒言」（桜井鷗村）に以下のようにある。

「……君は特に英文學に精通せられて、こは正しく君が第二の國語の状ありけり。新聞を讀まるゝにも、其英文なるは、其邦文なるよりも勞少しとは、予の屢々親しく耳にせし處なりき。また、祈禱、寐言、眞面目の談話及心籠めたる書翰などは、いづれも英語を用ゐられたる方多かりしとぞ。されば高雅純潔なる君が邦文學の、其宗教に負ふ處あるは素よりの事、特に其英文學に胚胎せること最も多かりしは今更いふを俟たざるなり。故に其英文の如きも、頗る圓熟自然の域に達せるの稱ありて、述作ありしものも亦尠しとせず。……」

若松賤子の夫である巖本善治も『小公子』（岩波文庫）の「後序」で以下のように述べている。

「……然し筆を執る時は、起き上つて机に向ひ、スラへと樂に書き了り、女学雑誌の一回分四五頁位は、只譯もなく書く様でしたが、…… / 元來、英語は幼年より習ひ覺えて、極難作もない様で、寝言でも申す時は、いつも英語でしたから、寧ろ外國の事には慣れて居たでせうが、……」

②「女学雑誌」227号から278号まで、24回分を単行本にした『小公子前編』（女学雑誌社）。

（明治24（1891）年10月28日刊行）

③ 若松の没後、全編を単行本にした『小公子』（博文館）。（明治30（1897）年1月26日刊行）

①は、若松の手になる初出テキストである。②は、若松自身が①に推敲を加えたものであるが、作品全体の前半部分だけである。若松は病没する前まで、①の後半部分にも手を入れて「後編」

表1 若松賤子訳『小公子』初出誌・初版本・全編本対照表

『女学雑誌』(初出誌)							『小公子 前編』 (初版本-女学雑誌社)		『小公子』 (全編本-博文館)	
No	発行日			号	頁		章立て		M24(1891). 10. 28	M30(1897). 1. 26
	年	月	日		始	終				
1	M23 (1890)	8	23	227	49	52	第1回	(上)	第1回 (1-28)	第1回 (1-20)
2			30	228	74	78		(下)		
3		9	6	229	98	103	第2回	(上)	第2回 (29-67)	第2回 (20-70)
4			13	230	127	131上		(中)		
5			20	231	155	157		(下)		
6		10	27	232	182	186上	第3回	(上)	第3回 (68-101)	
7			4	233	211	213		(下)		
8			11	234	238	240		(中)		
9			18	235	266	268		(下)		
10			25	236	293	295	第4回	(上)	第3回 (70-80)	
11	11	1	237	321	323	(下)				
12	M24 (1891)	5	23	266	425	428上	第5回	(上)	第4回 (80-105)	
13			30	267	451	454上		(中)		
14		6	6	268	477	481上	第6回	(下)	第5回 (153-207)	
15			13	269	505	508		(甲)		
16			20	270	537	540上		(乙)		
17			27	271	556	560		(丙)		
18		7	4	272	588	592上		(丁)		第5回 (105-143)
19			11	273	615	618	(戊)			
20			18	274	637	641	第7回	(甲)	第6回 (208-272)	
21			25	275	663	667上		(乙)		
22		8	1	276	7	11		(丙)		
23			8	277	31	35		(丁)		
24			15	278	57	62		(戊)		
25		9	22	279	85	89上	第8回	(甲)	第7回 (189-204)	
26			29	280	108下	112上		(乙)		
27			5	281	138	142上	第9回	(甲)		第8回 (204-222)
28			12	282	160	165上		(乙)		
29			19	283	186	189上	第10回	(甲)		第9回 (222-235)
30			26	284	224	227		(乙)		
31		10	3	285	246	248	第11回	(甲)	第10回 (235-271)	
32			10	286	268下	272上		(乙)		
33			17	287	299	302		(丙)		
34			24	288	320	324上		(丁)		
35		11	31	289	354下	358上	第12回	(戊)	第11回 (272-292)	
36			7	290	375下	378		(甲)		
37			14	291	404下	407		(乙)		
38			21	292	425	428		(丙)		
39		12	28	293	451	455上	第13回	(甲)	第12回 (292-311)	
40			5	294	476	481上		(乙)		
41			12	295	504	506	第14回	(甲)		第13回 (311-321)
42			19	296	528下	531上		(乙)		
43		M25 (1892)	1	26	297	558	562上	第15回		第14回(321-330)
44				2	298	583下	585	第16回	(甲)	第15回 (330-342)
45				9	299	600	603		(乙)	

の出版を準備していたが、火災によりその原稿は灰塵に帰してしまったとされる¹¹。③は、前半部分が②、後半部分が①をもとにしているが、桜井鷗村が「或は君が志を満たすこと能はざるべきも、かの女學雜誌上既載のものを取り、聊か魯魚焉馬の誤を訂し」¹²たとしているので、厳密には若松訳とは言いがたい。表1¹³に見るとおり、三種のテキストは章立ても少しずつ異なっているが、③の章立てが原著に合わせたものであるとされる。これらのテキストの資料的価値を探るため、諸本を校合してその異同を明らかにした研究もこれまでに見られる¹⁴。

本稿では、若松が生前に残した全編訳である、「女学雑誌」の初出テキスト（①）を用いて考察を行ない、前半部分についてのみ適宜初版テキスト（②）も参照する。

用例を掲出する際には、末尾の〔 〕内に「第〇回（上・中・下／甲・乙・丙・丁・戊）」と明らかにし、発話文の場合はその前に「話者→聴者」を（ ）内に示した。また、旧漢字の一部は通行の漢字に改めた。

4. 述語部否定構造における文法カテゴリーの実現

4.1 全体的な様相

日本語では一般的に、述語部構造における文法カテゴリーの結合は「ヴォイス（Vo）・アスペクト（A）・否定（N）・テンス（T）・モダリティ（M）」の順序で実現される。

＃2 「山田って、昨日のあの時間には残業させられていなかったらしいよ。」（作例）

下線部の述語部の語構成を見ると、「残業する・せる・られる・ている・ない・た・らしい・よ」となり、文法的意味は「漢語サ変動詞・使役・受身・継続・否定・過去・推量・終助詞」で、文法カテゴリーはやはり「ヴォイス・アスペクト・否定・テンス・モダリティ」の順序で並んでいる。

若松訳『小公子』の述語部否定構造はどうであろうか。調査の結果、表2のようになった。

述語部否定の形式が21形式見られ、全用例数は197例であった。今回の調査目的が、述語部否定構造の文法カテゴリーの結合の状況を見ることにあったので、用例数の多寡ももちろんであるが、それよりもどのような形式が実現されるのかが重要であった。そうは言いながらも、「ませんでした」の用例数が突出しているのが際立っている。

文法カテゴリーの配列の仕方は、「ヴォイス・アスペクト・否定・テンス・モダリティ」が基本ではあるが、表2をより細かく見ていくと、「ヴォイス／可能・アスペクト・丁寧・否定・テ

¹¹ 『小公子』（博文館刊）の「緒言」（桜井鷗村）より。

¹² 同上。

¹³ 初版本と全編本の章立ては、「第〇回（開始頁－終了頁）」というように表示した。

¹⁴ 北澤・趙（2009）を参照のこと。

表2 若松賤子訳『小公子』で見られる述語部否定構造の諸形式と、そこに含まれる文法カテゴリー

No	述語部否定	用例数	Vo/可能	A	丁寧	N	T	の／こと	丁寧	T	M	丁寧	終助詞
1	ませんでした	138			●	●	●						
2	ませんでした	6			●	●			●	●			
3	ませんでした	1			●	●		●	●	●			
4	なかったんです	6				●	●	●	●				
5	ないでした	9				●		●	●	●			
6	なかった(の／ん)でした	8				●	●	●	●	●			
7	ますまい	11			●	●					●		
8	ませんだろう	1			●	●					●		
9	ませんでしょう	1			●	●			●		●		
10	ませんでしたでしょう	1			●	●	●		●		●		
11	ませんでしたろう(よ)	2			●	●			●	●	●		●
12	なからう(って)	2				●					●		●
13	ないでしょう	1				●			●		●		
14	ないんでしょう	1				●		●	●		●		
15	なかったでしょう	2				●	●		●		●		
16	なかったのでしょう	1				●	●	●	●		●		
17	ないようですよ	1				●					●	●	●
18	ぬのでしょうか	1				●		●	●		●		●
19	れない(ね／よ)	2	●			●							●
20	れぬでした	1	●			●		●	●	●			
21	られないでしょうね	1	●			●			●		●		●
計		197											

ンス・の／こと・丁寧・テンス・モダリティ・丁寧・終助詞」となっている。

それでは、21の形式を、「丁寧・否定・過去」の形式、推量を含む形式、可能を含む形式の3つに大別して考えてみたい。

4.2 「丁寧・否定・過去」の形式

#3 セドリツクには誰も云ふて聞せる人が有ありませんかつたから、何も知らないであつたのでした。^{たれ}^い^{きか}^{ひと}^{あり}^な^し¹⁵ [第一回 (上)]

#3は、若松訳『小公子』の冒頭文である。この作品の述語部否定構造の中で用例数が圧倒的に多く、「賤子の言文一致文の専売特許の特色を示す」(安田 2008)とも言われる「ませんでした」については、これまでに多くの先行研究がある。松村 (1957)によれば、「ませんでした」という形が安定していく過渡期の丁寧・否定・過去の一形式が「ませんでした」であり、F. Evrardの会話書 *Cours de Langue Japonaise* から例を挙げている。椎野 (1975)では『小公子』における「ませんでした」の例を詳細に検討しながら、他の若松作品における用例を調べている。田中 (2001)では、圓朝の口演速記の例も挙げつつ、幕末から明治にかけての丁寧・否定・過去の諸

¹⁵ 原文では人名や地名に傍線を引いているが、用例掲出に際してはそれらの傍線を省略した。

形式の推移を明らかにしている。安田（2008）は、「ませんでした」が一部で言われていたような「横浜言葉」とするのは誤りであるということを、『小公子』に関する先行研究の不備を指摘しつつ確認し、『小公子』とその前後に見られる「ませんでした」の例を挙げている。また、彦坂（1984）¹⁶からの引用として、人情本『春告鳥』（為永春水、天保七（1836）年）の以下のような例を示している。

#4 そで「アイサ左様ございましたッけネ。あの朝帰して仕廻^{しまは}して私が^{いつしよ}同床に 薄「寐てくんなまして、私が鬱^{ふさ}情であるのを氣^き転^{ころ}しておくんなましたッけネエ。あの晩の様に嬉しいじれつてへ夜^{ばん}はありませんかったヨ 吉「ナニサまた嬉しいじれつてへ事^{いぐら}は幾度もあるはな。マア先刻^{さつき}いふとふりよく―手紙を書いて置なせへ。是非私がたづね当つてくはしく言てあげるから¹⁷

#4は、3人での会話の場面である。「薄（雲）」は花魁、「（お）そで」は新造、「吉（兵衛）」はおそでの客である。#4について、中村（1948：74-75）には「その他は、「有りませんかつたヨ」（春告鳥）の一例を除けば、ナンダをもって表現されていて……」と書いてはいるが、例文自体は実際に示していなかった。その後、否定・丁寧・過去の形式を研究した松村（1957）や田中（2001）にもこの例文は引用されていない。底本としたテキストの信頼度に問題があるなど、何らかの理由があって意図的に取り上げなかった可能性もあるが、否定・丁寧・過去の「ませんでした」の現時点での初出例となる。

#5 ……。メロン夫人^{かじん}がセドリツクに言葉^{ことば}をかけて、
若様^{わかさま}、お早^{はや}う存^{ぞん}じます、昨夜^{けふ}はよくお休^{やす}みになり升^あたか？、
セドリツクは眼^めを磨^こつて、ニツコリ笑^{わら}ひました、
お早^{はや}う、僕^{ぼく}子、こゝに居^ゐるの知^しりませんかつたよ。
といひ升^あた。（メロン夫人→セドリツク、セドリツク→メロン夫人）[第七回（甲）]

#6 侯爵^{こうしやく}は又^{また}お笑^{わら}ひなさつて、それは悪^{わる}かつたとは仰^{おつしや}られませんかつた。[第九回（乙）]

若松訳『小公子』における「ませんでした」の用例は全139例見られた。そのうち、冒頭文をはじめそのほとんどが地の文であり、発話文は5例のみである。すべてセドリツクの発話であるが、#5はそのうちの一つである。#6は地の文での例であるが、述語部の語構成は「おっしゃる・

¹⁶ 彦坂佳宣（1984）「幕末期における転封藩士の言語生活——桑名家中弁の成立と様相の一斑——」『国語学』第139集、国語学会。

¹⁷ ここでは、小学館『新編日本古典文学全集 80 洒落本 滑稽本 人情本』から該当箇所を抜き出した。

れる・ます・ん・かった」となる。「おっしゃる」という敬語動詞の後に尊敬の助動詞「られる」が付いて、現代では誤用とされる二重敬語になっている。

「ませんでした」以外の「丁寧・否定・過去」の述語部形式の用例は以下のとおりである。

#7 セドリツクの^{しゅつたつご}出立後二三週間もこの^{しうかん}通りにして居て、何も新しい^{とほ}考へは起り^{おこ}ませんでした。^{なに あたら かんが}
た。[第十二回 (甲)]

#8 一^{いつたい}躰、モウドント^{けふし}教師は、其^{そのしよくむせう}職務上の必要の事情で^{ひつよう}ドリ^{じじよう}ンコート城へ^{ぜう}推参する時ほど、^{すみさん}
^{ふゆかい}不愉快に^{かん}感じることはあり^とませんでした。[第七回 (丙)]

#7, 8は「ません(の)でした」の例である。松村(1957)によると「ませんでした」は、江戸語には見られず、東京語になってから発生発達し、明治十年代の後半、特に明治二十年代以後に一般化したとされるので、若松訳『小公子』が発表された頃には、丁寧・否定・過去の形式として安定していたと考えるが、本作品に限れば「ませんでした」が「ませんでした」を圧倒している。「ませんでした」の例が少ないので、本作品だけをもって両形式の表現差について述べることはできないが、ここで見る限りにおいてはそれほど大きな差はないように考えられる。

#9 僕、^{ぼく こうま}小馬^{もた}なんか持^{おも}ふと思ひ^{おも}せんかつたよ！ チツトモ、そんなと、思^{おも}は^{おも}なかつたんです。
かあさん、どんなに、^{うれ}嬉しがるか知^しれ^れませんよ、お祖^{ぢい}父さん、僕^{ぼく}になんでも下^{くだ}さるのネ(セ
ドリツク→モウドント) [第七回 (戊)]

#10 セドリツクは^{じぶん}自分が^{わかさま}若様のやうだか、^{やう}様でないか知^しり^りませんかつた。^{ぜんたいわか}全躰若さまといふも
のがどんなものかといふことさへ、知らないのでした。[第一回 (下)]

#11 次の週間の内にセドリツクは^{こうしやく}侯爵になる利益を^{りえき}ます―^{しりはじめ}知始^{しか}ましたが然^{なにごと}し何事でも^{じぶん}自分の
^{のぞ とほ ほとん かな}望む^な通り^な殆ど^{こころ}叶へられぬ^{のみこ}とはないといふ^{ようす}とは中―セドリツクの心^{こころ}に吞^{のみこ}込め^{ようす}ぬ様子で、い
つまでも^{じゆうぶん}充分には^{がつてん}合點^{ゆか}が行^{ゆか}なかつたのでした。[第四回 (上)]

#9～#11は「ない+です」の形式である。断定の「です」も明治期の言文一致とともに安定していく助動詞である。「ない」と「です」の組み合わせが、#9では「過去+現在」、#10では「現在+過去」、#11は「過去+過去」となっており、#9は「ん」、#10と#11は「の」を介在させている。#9の「なかつたんです」は4例あり、すべてセドリツクの発話である。#10と#11の形式は全例地の文での使用である。

4.3 推量を含む形式

若松訳『小公子』の述語部否定構造において特に目を引いたのが「推量」を含む形式である。

前掲の表2を見てもわかるように、今回採集した21形式のうち13形式、つまり約3分の2が推量に関わる表現であった。

#12 そんならば、あの子も一處に連れて行なかつちやなり升まいよ。

(ロリデール夫人→ドリンコート侯爵) [第十一回 (丙)]

#12は「丁寧・否定・推量・現在」の「ますまい」の例である。「否定推量」の助動詞「まい」が分析的傾向により「否定」と「推量」の意味に分かれて、他の形式が生じていく。本調査では「ますまい」が8例あったが、それ以外に#13～#15に見られるような4形式が見られた。

#13 セドリツクは何氣なく、

エー、好でせうよ、だつて僕は又お祖父さまの親類なんでせう。それから僕はお祖父さまの息子の子供でせう。だから好にきまつてるじやありませんか。好でなきやあ、僕の欲しいものなんでも遣るなんて云ひやしませんだろう。そうして、あなたを迎ひになんか、よこしやしませんじやないか？。

ア、なるほど、そういふ譯なのですか？。

エー、そうですとも、あなただつて、そうだと思いませんか？ 孫の好でないお祖父さまなんか、ありやしませんでせう。(セドリツク→ハヴィシヤム、ハヴィシヤム→セドリツク、セドリツク→ハヴィシヤム) [第五回 (上)]

#14 一生、歡樂と放逸を盡したるものが、壯麗を極めた坐敷の中に、片足を足臺に支へながら、一人坐つて居て、癪癪を起し、ヲヂへして居る給事どもに怒鳴りつけるより外心遣りがないといふのでは、余り面白くは有ませんかつたでせう。[第九回 (甲)]

#15 ……。兄の子供たちなぞは、虎のそばへ寄添ふ心持でなければ、あんなことは、出来ませんでしたらうよ。(ロリデール夫人→その夫) [第十一回 (丙)]

#13はセドリツクとハヴィシヤム（ドリンコート家附属の代言人）の会話である。ここでセドリツクのハヴィシヤムに対しての発話に「丁寧・否定・推量」表現が二種類出る。丁寧・否定の「ません」に推量の「だろう」、その丁寧形「でしょう」のついた形式である。そして、#14は「丁寧・否定・過去」が「ませんでした」なので、そこに推量の丁寧形の「でしょう」が、#15は「丁寧・否定・丁寧・過去」なので、そこに推量の普通形「だろう」が付加されている。

#16 アノ、かあさんがネ、さういつたんです、大變金持になるのは、そう、容易ことじやなかろうつて、……（セドリツク→ドリンコート侯爵）[第十回（乙）]

#17 イ、ーへ、博物館じやないでせう。僕のお祖父さまはみんな僕の祖先の畫像だつて仰るんです。（セドリツク→ホツプス）[第十六回（甲）]

#18 ……、婦の人だからベース、ボールなんかで遊んだとがないいでせう、……
（セドリツク→ドリンコート侯爵）[第七回（乙）]

#19 たとひ世に如才ないといふ如才ない人が、フォントルロイの舉動に拔目なく眼をつけて居られた老侯の氣に入る様にと、フォントルロイに入智慧をした處が、逆もこふ甘く成效する策を授るとは出来なかつたでせう。[第九回（甲）]

#20 あなたは此老人の云ふとがよく分らなかつたのでせう。……
（ハヴィシャム→セドリツク）[第三回（上）]

#21 どふもそうは行ないようですよ、……（セドリツク→ホツプス）[第二回（上）]

#22 オヤ、さ様ですか、さ様ならば、私はあの子を手離さねばならぬのでせうか？……
（エロル夫人→モウドント）[第二回（中）]

#16と#17は「じゃない」に推量の付加した形式で、#16が普通形、#17が丁寧形である。
#19は「ないでしょう」の「ない」が過去形になった「なかつたでしょう」、#18は#17に、#20は#19に「の／ん」の介在する形式である。#21は「そうは行かない」という句に推量の「ようだ」の丁寧形が、#22は当為表現「～ねばならぬ」に推量の意味の「のでしょうか」が付加した形である。

4.4 可能を含む形式

今回の調査では、ヴォイス、アスペクトの言語事象が関与する、否定表現を含む述語部は見られなかった。ただ、ヴォイスと同じ位置に来る「可能」の「れる／られる」が付いた形式を、以下#23、#24に示す。#23は普通形、#24は丁寧形となっている。

#23 僕はそれが嫌なんですよ、ヒヨツトスルトいつまでか逢れない子、……

#24 自慢と憤怒で胸を燃した老貴人は、心の情は一切人に漏れぬと思はれて、自分の感じた
とや、懸念したとを取て推測した人があるうとか、況して噂にかける様なものがあるな
ど、は少しも思ひよられぬのでした。[第七回 (丙)]

次の例のように、侯爵である祖父に対してのセドリックの発話の中に、「可能・否定・丁寧・
推量」の例も見られた。

#25 そうですか？ それじゃ忘れられないでせう子、……

(セドリック→ドリンコート侯爵) [第七回 (乙)]

4.5 考察

今回、若松賤子訳『小公子』を資料として否定表現を含む述語部について調査し、文法カテゴリーの結合した21の形式を採集することができた。それらを意味別に大きく、「丁寧・否定・過去」の形式、推量を含む形式、可能を含む形式の3つに分類して考察する。

まず、「丁寧・否定・過去」の形式を見ると、「マセン系」と「ナイ系」に分けることができる。

マセン系では、「ませんでした」という形式が圧倒的であった。これまでに多く指摘のあるように、若松訳『小公子』の特記すべき表現であるが、明治20年代以降「ませんでした」へと移行することを考えると、「ませんでした」と「ませんでした」の間にどれほどの表現差があるのかということを考えなくてはならない。しかしながら、文法カテゴリーの配列から考えると、「ませんでした」と「ませんでした」の差は、「過去」の意味を表す部分が普通形か丁寧形かの違いとなる。「ません」が丁寧形なので、後続部分も丁寧形にする方が待遇度が統一されるので、整合性がとれて安定するとも言われている¹⁸。一時的な「ませんでした」が「ませんでした」の安定性に吸収されていくという構図の中で、本作品では併存していると考えられる。

ナイ系では、「なかったんです」と「ないのでした」は、表2を見ると、テンスの位置に前後差があり、「なかったのでした」は前後双方にテンスのある形式として存在している。

次に、推量を含む形式である。推量を含む形式は今回採集した形式の約3分の2を占め、前方の否定が丁寧形か否かで、これらも「マセン系」と「ナイ系」に分けることができる。

マセン系は、8例見られた「ますまい」とその他の形式を分けて考えると、「ますまい」は「丁寧+否定・推量」であるのに比べ、その他は「丁寧・否定+推量」の形式をとっている。これは分析的傾向で説明ができる。「丁寧・否定・過去」の「ませんでした」と「ませんでした」の構

¹⁸ その他に、「ませんでした」は、終止現在形「ませんです」が想定できるのに対して、「ませんでした」の場合は、「ませんかつ」の終止現在形が想定できない、という不安定性も指摘できるだろう。

図と同じように、「ませندろう」と「ませんでしょう」、「ませんかっただしょう」と「ませんでしたろう」の共存がある。

ナイ系は、シンプルな形式の「なかろう」から始まり、そこに丁寧形がつく「ないでしょう」、「ない」が過去形の「なかった」になる諸形式、その他推量の「ようだ」の付いた形式、当為表現に推量の意味の付いた形式が見られた。

限られた資料の中で、すべての表現が出揃っていて比較しているわけではないが、それほど意味差のない、複数の形式に共存関係が見られる。

5. まとめ

若松賤子訳『小公子』を資料として、述語部否定構造内における文法カテゴリーの承接関係について調査した結果、次のようなことが確認された。

- (1) 日本語では一般的に、述語部構造における文法カテゴリーの結合は「ヴォイス (Vo)・アスペクト (A)・否定 (N)・テンス (T)・モダリティ (M)」の順序で実現される。しかし本調査によれば、採集した述語部否定構造は「ヴォイス／可能・アスペクト・丁寧・否定・テンス・の／こと・丁寧・テンス・モダリティ・丁寧・終助詞」と、より細かくなっていた。
- (2) 本調査では、述語部否定の形式が21形式見られ、全197例あった。それらを「丁寧・否定・過去」の形式、推量を含む形式、可能を含む形式の3つに大別して考察を行なった。
- (3) 「丁寧・否定・過去」の形式には6形式があった。これらは「マセン系」と「ナイ系」に分けられた。マセン系は、「ませんかっただしょう」が圧倒的であり、それとの併存という形で「ませんでした」があった。ナイ系では、「なかったんです」と「ないのでした」ではテンスの位置に前後差があり、「なかったのでした」は前後両方にテンスのある形式として存在していた。
- (4) 推量を含む形式については、今回採集した21形式のうち13形式と、約3分の2を占めた。これらも「マセン系」と「ナイ系」に分けられ、「丁寧・否定・過去」の「ませんかっただしょう」と「ませんでした」の構図と同じように、「ませندろう」と「ませんでしょう」、「ませんかっただしょう」と「ませんでしたろう」の共存があった。
- (5) 今回の調査では、ヴォイス、アスペクトの言語事象が関与する、否定表現を含む述語部は見られなかった。ただ、ヴォイスと同じ位置に来る可能の「れる／られる」が付いた形式が2例、「可能・否定・丁寧・推量」も1例見られた。

課題として、まず挙げなければならないのは、原文との対比である。上記の併存する形式が、原文のなんらかの反映であるかどうかを確認する必要がある。

そして、さらに、今回の限定された作品内の調査を参考にしながら、今後、調査資料と用例数を大幅に増やし、諸形式をより多く揃えた上で、近代日本語の述語部否定構造内における、文法カテゴリーの結合とその形式との関係を明らかにしていきたい。

参考文献

- 小野 正弘 (2012) 「近代語文献の述語部構造分析の方法―地の文と発話文を対比させながら―」(第 298 回日本近代語研究会 発表資料)
- 金子 弘 (1989) 「動詞+ラシカッタという言い方をめぐって―会話文・地の文の別と文法カテゴリーの順序―」『山形女子短期大学紀要』第 21 集
- 北澤 尚・趙 燦 (2009) 「若松賤子訳『小公子』の初出本文と初版本の異同について」『東京学芸大学紀要 人文社会科学系 I 第 60 集』
- 川戸 道昭 (1999) 「若松賤子と『小公子』」『復刻版 明治の児童文学 翻訳編 第三巻 バーネット集』五月書房
- 椎野 正之 (1975) 「若松賤子訳『小公子』における『ませんでした』」『文化紀要』第 9 号、弘前大学教養部
- 田中 章夫 (2001) 「近代日本語の文法と表現」明治書院
- 鶴橋 俊宏 (2014) 「若松賤子『小公子』の推量表現について」『言語文化研究』第十三号、静岡県立大学短期大学部 言語文化学会
- 中村 通夫 (1948) 『東京語の性格』川田書房
- 飛田 良文編 (2007) 『日本語学研究事典』明治書院
- 許 哲 (2014a) 「複数の否定要素からなる述語部構造の特質―二葉亭四迷『浮雲』を資料として―」『文学研究論集』第 40 号、明治大学大学院文学研究科
- (2014b) 「『金色夜叉』に見る述語部否定構造の文法化」『明治大学日本文学』第 40 号、明治大学日本文学研究会
- 益岡 隆志 (2013) 『日本語構文意味論』くろしお出版
- 松村 明 (1957) 『江戸語東京語の研究』東京堂出版
- 松本 隆 (2012) 「マセンカッタとマセンデシター若松賤子の近代口語作品における打消過去の丁寧表現―」『清泉女子大学人文科学研究紀要』(33)
- 安田 尚道 (2008) 「『ませんでした』は横浜言葉か?―『ませんでした』の昔と今」『国語語彙史の研究 二十七』和泉書院
- 山本 正秀 (1973) 「若松賤子の翻訳小説言文一致文の史的意義」『専修国文』14 号、専修大学国語国文学会